石巻市

文化財だより

第25号

もくじ

雪峰関係資料調査報告 ―その1― …… 1

田道町遺跡発掘調査報告 …… 13

平成7年度文化財めぐり …… 21

第42回文化財防火デー …… 22

指定文化財一覧 …… 23

石巻市教育委員会

平成六年度文化財調査報告

雪峰関係資料調査報告（一）

～雪峰大覚と雪峰庵跡～

石巻市文化財保護委員　佐藤雄一

一、雪峰大覚の出自と裸雪峰の由来

石巻市羽黒町菩提山永巌寺の第八世雪峰大覚は俗に裸雪峰と呼ばれて、市民には親しまれてきたのであるが、その出自については、はっきりとしたものが知られていなかった。

従来、雪峰大覚についての市民の理解は、佐藤露江氏の編集になる『石巻市史』の記述によっている。現在、刊行中の『石巻の歴史』においても、この佐藤露江氏の論説を一歩も出るものでないし、したがって、裸雪峰としての雪峰大覚の謎は依然として解明されてはいない。私が平成六年度の石巻市文化財調査の一環として、雪峰大覚を調査しはじめて、次の三つの雪峰大覚に関係する出自の資料を得ることができた。

▶菩提山永巌寺山門

(1)『石巻市史』

雪　峰　大　覚

唐の人。洒脱の禅僧にして時々衣を棄てて民衆の中に入りて世論を聞き、または説法したので、人呼んで裸か雪峰と呼んだ。書画を良くし、自ら刻し、今猶幾多の遺墨墓碑の名筆を残している。一石一字の般若理趣文経の孕籠もり不動尊を作って、堂宇を建て、大黒天を彫刻する等遺品多く、雪峰の書は今猶世上尊重されているが最後に雪峰庵を建てた。

尚雪峰は宝暦十年十二月、弟子の天外別伝和尚（当時九世）と共に坐定に入り釈尊成道の日八日、師弟相並んだまま坐脱大寂に入った。生涯を通じて奇言奇行に富み世にも傑出した禅僧であった。

◀永巌寺不動堂

＊不　動　堂

胡同古佛を第八世雪峰和尚代勧請されたもので、本尊坐像八尺作者不明。堂の扁額は雪峰の雄渾な書である。

(2)『仙台人名大辞書』

雪　峰　大　覚

牡鹿郡石巻裏町字八津澤曹洞宗永巌寺第八世。常陸の人。初め払を上州伽葉山に秉り、道風遠近に振るう。僧衆其の能を嫉み、讒奸交々至る。遂に職を解き法衣を脱し、自ら脱衣道人と号す。而して勤行愈励む。世を避けて江戸深川に住す。時に戯画を作る。瀟洒軽妙世に器量せらる。永巌寺七世刹東請うて嗣となす。固辞再三遂に其の法を嗣ぐ。享保年中、新たに不動銅像長一丈二尺及び十大仏像を置く。今尚儼存す。臨終に際し後事を遺言す。九世天外枕を擁して曰く、師苟も終わらば弟子亦殉ぜんと。乃ち方丈に入りて洗沐衣を整え、両師同日同刻端然坐化す。

実に宝暦十年八月二十二日なりという。

(3)『近世高僧墨蹟目録』

大　覚　雪　峰

その郷貫を明らかにしない。法を徳翁良高の法嗣、百旬悟融に嗣ぎ、陸前永巌寺（第八世）、上野龍華院（第二十四世）に住した。宝暦十一年示寂。世壽不詳。下総東昌寺黙山と龍華院雪峰とが関三刹の一である聰寧寺を相手どって起こした訴訟事件で前後十年の係争の後、黙山、雪峰は敗訴となって、脱衣追放の刑に処せられた。これにより世に「脱衣雪峰」と称された。

天高群象秀　前華葉雪峰　書

この雪峰大覚に関する三つの記述を総合すると、次のようにまとめることができると思われる。

すなわち、雪峰大覚は常陸の人で、初め上州伽葉山の二十四世として、その道風遠近にふるい、その学は大いなるものがあった。ところが、享保二十年（一七三五）に曹洞宗の大本山総持寺において、「通幻四箇道場論争」なる事件が起ることになる。この論争は、総持寺の基盤をゆるぎないものとした二代峨山紹碩の法脈を継ぐ五人の中で特に勢力の強かった通幻寂霊が一生のうちに御開きになった四つの寺についての論争である。すなわ

ち、通幻寂霊が開いた四ケ寺は、総持寺内の五院の一つである妙高庵、摂丹境の永沢寺、越前の竜泉寺、同じく聖興寺であるとするのが、通説であり、もともとこの説が正しいのであるが、聖興寺ではなく下総の総寧寺であるとする主張が出され、両者がはげしく対立したのである。

そして、この論争が幕府へ訴えられ、裁断をあおぐことになったのである。この事件は単に聖興寺か総寧寺かという単純には片づかない問題をかかえていた。

当時、徳川幕府は関東の曹洞宗をまとめて三つの僧録に管理統制させる制度を拵えていたのである。三つの僧録とは下総の総寧寺、下野の大中寺、武蔵の竜穏寺であり、これを関三刹と言った。通幻四箇道場論争の一方は、この関三刹の筆頭の地位を占める総寧寺であったのである。一方、聖興寺が正しいと主張するのは、下総の東昌寺黙山元轟と上野沼田竜華院の雪峰大覚の二人であり、当時彼は寺社奉行に栄進していた。

総寧寺の主張は成立し得ないのだが、何といっても僧録の筆頭であるという時の権威もあって、大本山総持寺も総寧寺に有利な証言をしたので、幕府も総寧寺の言い分を擁護する立場を取ったので、到頭雪峰、元轟は敗訴してしまう。時に延享元年（一七四四）、訴訟が始まってから十年目のことであった。この裁定を下したのが名奉行として知られている大岡越前守であったという。

この裁定に対して、雪峰、元轟の二人は、この間違った裁定に対して、宗門の法を守るために決して自分達の主張をまげなかったのである。幕府はこのような態度をとっている二人に対して、公儀の裁許に違背するということは許しがたいとあって、法衣を剝いで追放処分ということになったと言う。

追放といっても住持職を取り上げられたというだけにとどまらず、「武蔵、山城、摂津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曽路筋、下野日光道中、甲斐、駿河、下総各国のお構えの場所堅く、徘徊つかまつりまじく」とあって、立ち入りを止められた地域は広い範囲にわたっており、その処分は厳しさと峻酷を極めたものであったようである。裸雪峰といわれる謂われはこんなところにあったようである。

しかし、幕府のこの裁定に対して、雪峰、元轟の弟子達は、幕府の片手落ちな処置に対して、愁訴歎願の形ではあったが、政道の理不尽な裁定を指弾し続けるという行動が続いたのである。そのため幕府も放置も出来ないし、見過ごすこともできないという窮地に追い込まれてしまうことになる。そこで幕府は大本山総持寺に対しても出府を命じ、前の決定をくつがえすわけにも行かないながら、両方共に、証拠になるべきものも実はないのだといったことにして、宝暦二年（一七五一）から三年にかけて再吟味を重ねた結果、ついに追放赦免のことが決まったのである。

追放処分をうけた後の雪峰大覚は江戸深川に住んでいたのであるが、永厳寺七世刹東普界に請われて永厳寺八世となったのである。そして、稲井大瓜の休石に雪峰庵を営むことになったのである。

二、雪峰庵跡とその石碑群

石巻市大瓜休石に雪峰庵跡と伝える古蹟がある。中央に塚を築いて石碑を立て、それを取り囲むように多数の石碑群が造立されている。おおよそ六〇基ばかりの石碑群の中には板碑や近世の墓碑等も見受けられるが、大部分の石碑は従来は見当たらなかった石碑群である。拓本を採って解読をすすめた結果、それは「過去七佛」と「五十佛」を刻したものであることが判明した。いわゆる五十七佛を刻したものである。今まで、五十七佛を造立したという例は報告されていない。おそらく、雪峰庵跡に造立されている五十七佛の石碑群が初めてではないだろうか（図版参照）。

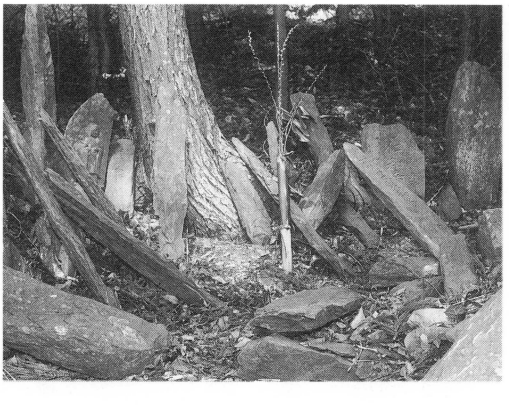
三、石巻市内の雪峰関係の資料

石巻市内の雪峰関係資料には、次のものが確認された。

a　雪峰の石碑（永厳寺）
b　「不動明王」の遍額（永厳寺）
c　富士の絵（永厳寺）
d　掛軸二本（亀井久兵衛氏）
e　「紫雲山」の遍額（涌谷光明寺）

四、これから調査を必要とする事項

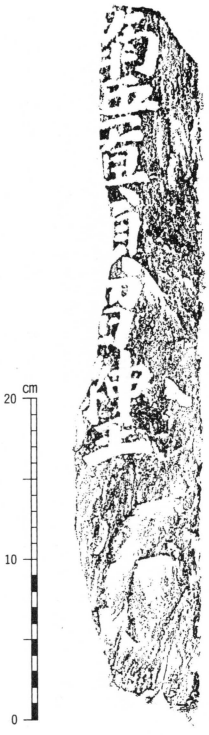
a　雪峰庵跡の測量
b　雪峰庵跡の石碑採拓（残分）
c　雪峰大覚と百句悟融との関係
　　～岩手県正法寺との関係～
d　過去七佛と五十佛
e　大本山総持寺の雪峰関係の資料
f　黙山元轟のその後
g　下総総寧寺のこと



▶雪峰庵跡石碑群

◀雪峰庵跡石碑群

No. 3

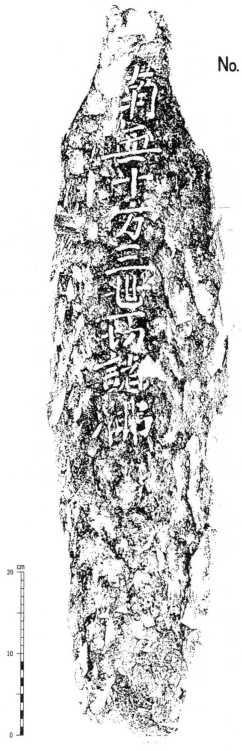


高さ：47cm　幅：8 cm
厚さ：5. 5cm

No. 2

高さ：52cm　幅：11cm
厚さ：9 cm

No. 1

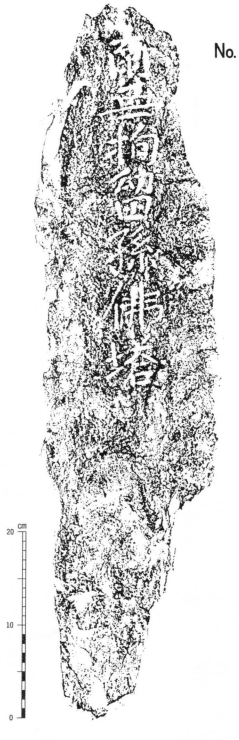


高さ：91cm　幅：22cm
厚さ：9 cm

No. 6

高さ：54. 5cm　幅：11. 5cm
厚さ：3 cm

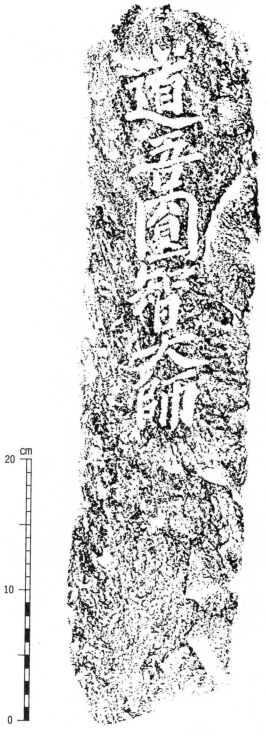
No. 5



高さ：78cm　幅：19cm
厚さ：3 cm

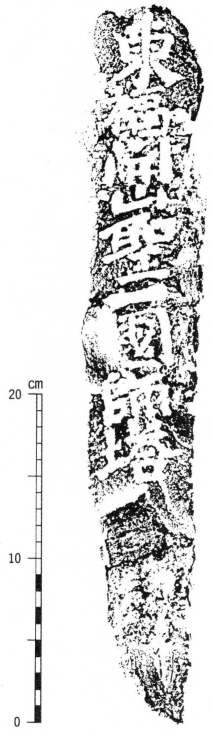
No. 4

高さ：69cm　幅：28. 5cm
厚さ：6 cm



No. 9

高さ：58.5cm　幅：13.5cm
厚さ：11cm



No. 8

高さ：45cm　幅：8 cm
厚さ：7.5cm

No. 7

高さ：71cm　幅：12cm
厚さ：4 cm

No.12

高さ：145cm　幅：18cm
厚さ：9 cm

No.11

高さ：107cm　幅：18cm
厚さ：6 cm

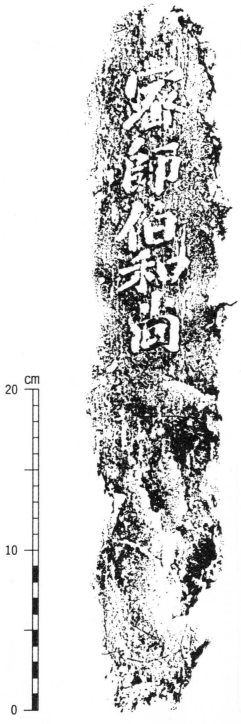
No.10

高さ：70cm　幅：6 cm
厚さ：9 cm

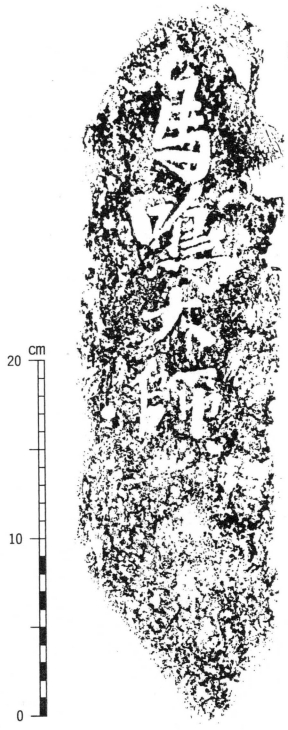
高さ：81cm　幅：20cm
厚さ：3.5cm

高さ：85cm　幅：23cm
厚さ：2.5cm

高さ：91cm　幅：16cm
厚さ：3cm



高さ：47cm　幅：9cm
厚さ：5.5cm

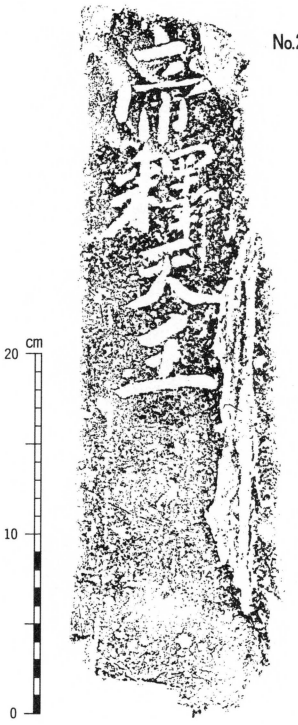


高さ：47cm　幅：11.5cm
厚さ：7cm

高さ：89cm　幅：27cm
厚さ：6cm

No.21

高さ：100cm　幅：13.5cm
厚さ：4cm



No.20

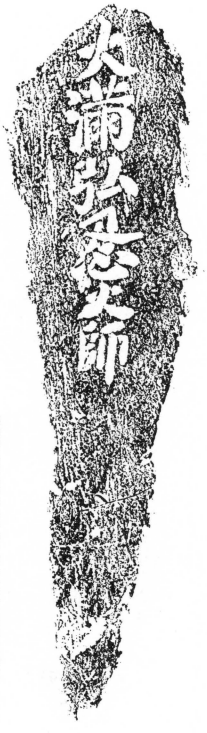
高さ：40cm　幅：11.5cm
厚さ：3.5cm

No.19

高さ：53cm　幅：12cm
厚さ：8.5cm

No.24

高さ：44cm　幅：13cm
厚さ：5.5cm



No.23

高さ：52cm　幅：12cm
厚さ：7.5cm

No.22

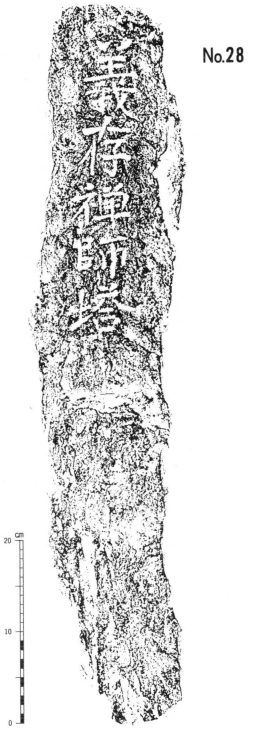
高さ：66cm　幅：10cm
厚さ：7cm

高さ：96cm　幅：7cm
厚さ：10cm

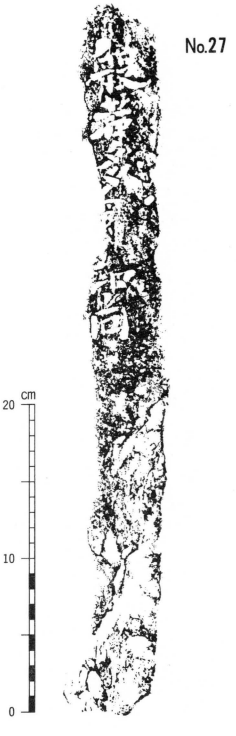
高さ：55cm　幅：16cm
厚さ：4cm

高さ：55cm　幅：16cm
厚さ：4cm

高さ：70cm　幅：20cm
厚さ：3cm



高さ：86cm　幅：16cm
厚さ：4.5cm

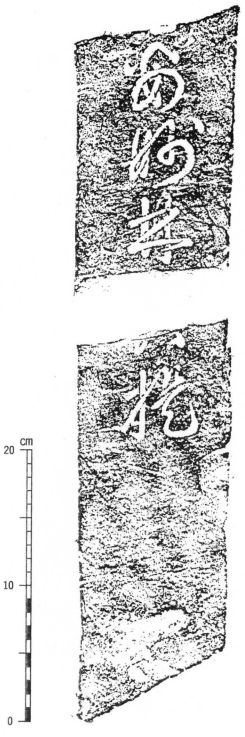


高さ：47cm　幅：5.5cm
厚さ：3.5cm

No.32

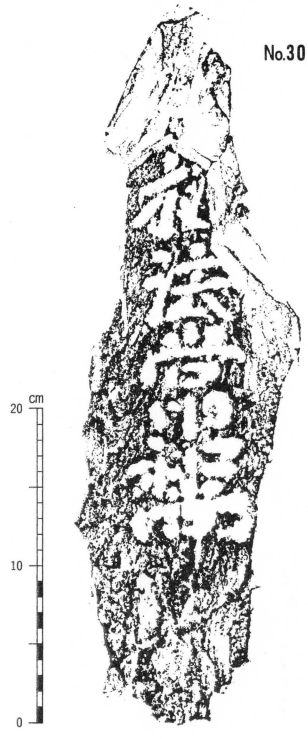
高さ：66cm　幅：10cm
厚さ：8cm

No.31



高さ：52cm　幅：11.5cm
厚さ：8cm

No.30



高さ：47cm　幅：13cm
厚さ：6cm

No.35

高さ：102cm　幅：11cm
厚さ：8cm

No.34

高さ：51cm　幅：14cm
厚さ：4cm

No.33

高さ：64.5cm　幅：13.5cm
厚さ：6cm

No.38

高さ：95cm　幅：16cm
厚さ：2.5cm

No.37

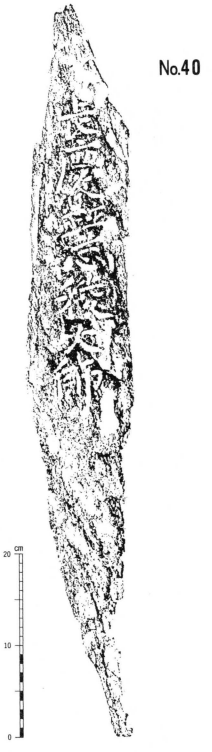
高さ：67cm　幅：10cm
厚さ：7cm

No.36

高さ：88cm　幅：8.5cm
厚さ：7.5cm

No.41

高さ：47cm　幅：14cm
厚さ：3.5cm

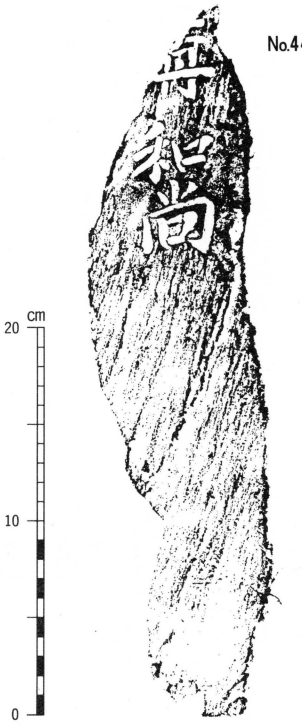


No.40

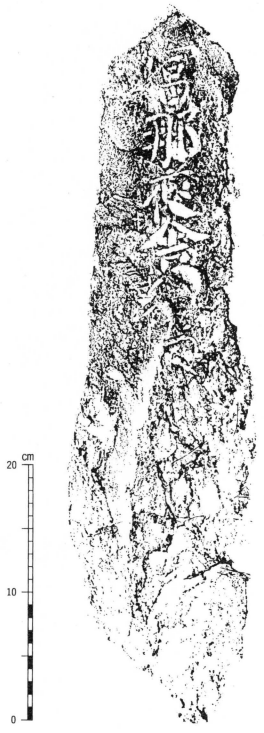
高さ：82cm　幅：11.5cm
厚さ：6.5cm

No.39

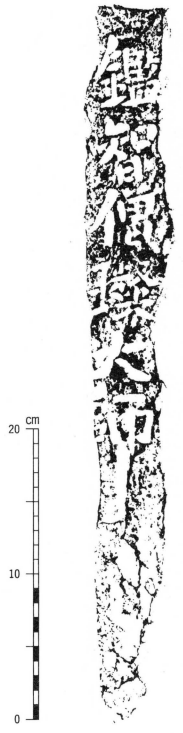
高さ：61cm　幅：11.5cm
厚さ：8.5cm



高さ：48cm　幅：8cm
厚さ：5.5cm

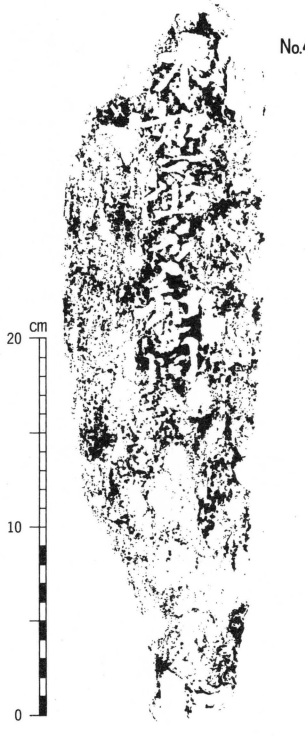


高さ：57cm　幅：14cm
厚さ：7cm

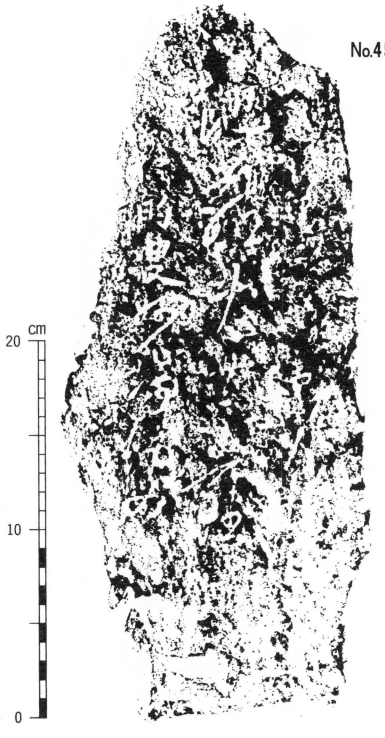


高さ：53cm　幅：7cm
厚さ：4.5cm

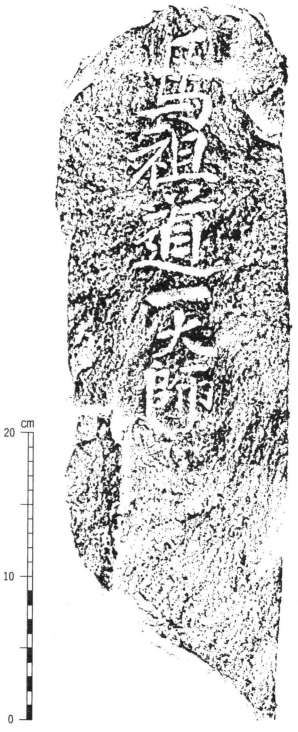
高さ：130cm　幅：37cm
厚さ：16cm



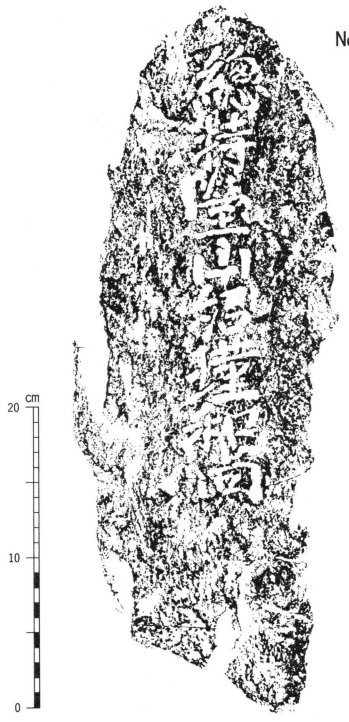
高さ：38cm　幅：11cm
厚さ：4cm



高さ：42cm　幅：16cm
厚さ：4.5cm



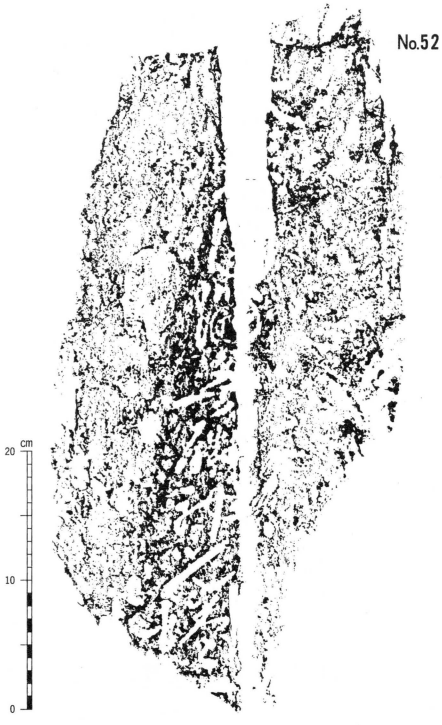
高さ：53cm　幅：16cm
厚さ：2cm



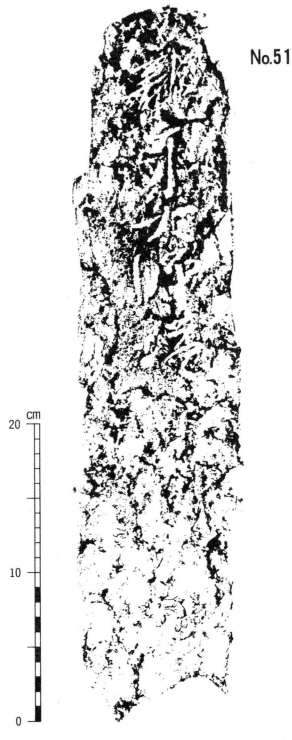
高さ：48cm　幅：19cm
厚さ：4cm

高さ：97cm　幅：13.5cm
厚さ：9cm

高さ：134cm　幅：46cm
厚さ：12cm

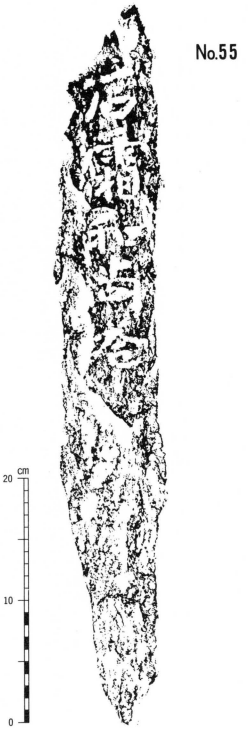


高さ：56cm　幅：27.5cm
厚さ：3.5cm

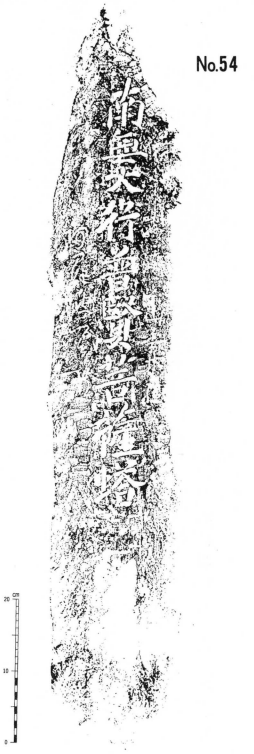


高さ：49cm　幅：11cm
厚さ：3cm

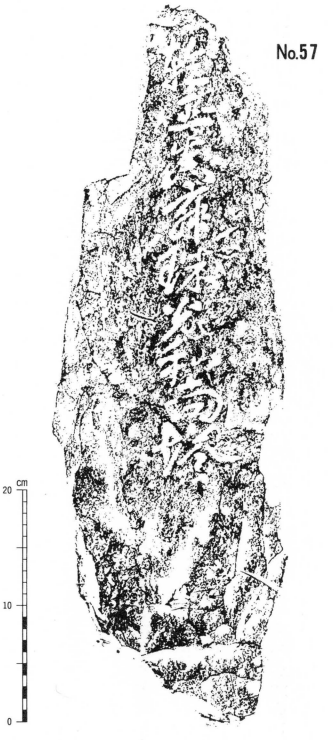
高さ：75cm　幅：33cm
厚さ：7cm



高さ：60cm　幅：8.5cm
厚さ：6cm



高さ：100cm　幅：17cm
厚さ：7cm



高さ：63cm　幅：21.5cm
厚さ：4cm

平成七年度

田道町遺跡発掘調査報告

～D地点～

I　調査実施要綱

【遺跡所在地】
石巻市田道町二丁目地内

【調査対象面積】
一二〇㎡

【調査期間】
平成七年一〇月二三日
～一二月一五日

【調査主体】
石巻市教育委員会

【調査担当者】
石巻市教育委員会
社会教育課文化係主任主事　岡　道夫

【調査参加者】
相沢敏郎　長谷川信雄
飯藤明子　不流和夫

II　調査の概要

一　はじめに

田道町遺跡は、古墳時代から平安時代（四世紀から十世紀）にかけての集落があったと考えられていた遺跡で、平成三年に行われたA地点及びC地点の発掘調査でもそのことが確認された。

A地点では、古墳時代や奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出された。また、C地点の発掘調査では、大きさが一〇mの大型住居跡をはじめ、「真野公」と記された出挙（すいこ）を示す木簡、銅製の帯金具等が出土し、大きな成果が得られた。

この成果から、田道町遺跡は古墳時代、奈良・平安時代の集落であり、特にC地点は一般集落とは異なり、八世紀から十世紀頃にかけての公的な施設があったところと考えられる。

今回の発掘調査は、C地点に隣接した約一二〇㎡を対象にし、平成七年一〇月二三日から実施した。

二　田道町遺跡の位置と環境

田道町遺跡は、石巻市の中心部にある日和山の北西部、田道町一丁目・二丁目にかけて広がる遺跡で、このうち今回発掘調査を行ったところは、JR仙石線陸前山下駅の東、約四〇〇mのところである。

この周辺の標高は一・四～一・六mと市内の平野部よりもわずかに高くなっているが、このように平野部のなかのわずかに標高の高いところ（微高地）からは、矢本町の「赤井遺跡」など遺跡が多く発見される。

これは、高いところのほうが水はけが良く、生活するのに条件が良かったためと考えられる。

三　田道町遺跡周辺の遺跡

田道町遺跡の二〇〇m程東には、清水尻遺跡がある。この清水尻遺跡からは「上」、「毛？」などと墨で書かれた土器（墨書土器）が出土しており、清水尻遺跡と田道町遺跡との関連性が注目される。

四　今回の発掘成果

今回の発掘調査では、掘立柱建物跡と考えられる柱穴や溝跡が発見された。

【溝　跡】

今回の調査で5条の溝跡を検出した。これらは、C地点で検出した1、2、3、4、8号の各溝に対応するものである。いずれも堆積土中から、土師器、須恵器の破片が出土していることから、奈良・平安時代の遺構と考えられる。

特に8号溝は、東側に南北に列をなす直径二〇cm程度の柱穴を伴っており、C地点の大型住居や掘立柱建物群と同じ方向性を持っていることから、これら建物群を区画する何らかの施設があったと考えられる。可能性として塀跡が考えられるが、現段階ではその明確な痕跡が確認されなかったことから、溝跡としている。

また、東側の柱列は、8号溝と一緒にあったものなのか、時期差があったのかは不明である。

【掘立柱建物跡】

明確に柱痕跡を伴う柱穴を検出していることから、掘立柱建物跡があったと考えられるが、C地点で検出した柱穴とは組み合わないことから、今回の調査範囲の外に広がっているものと考えられる。

また、柱穴の掘り方も浅いものが多く、柱の周りを石で根固めしているものがあるなど、C地点（特に8号溝以西）の柱穴の掘り方とは違う特徴が見られる。

【その他】

今回の調査範囲の中央部から、多量の河原石が検出された。当初、石敷遺構と考えていたが、確認の結果、地山と認定した層の下から検出されており、河川の氾濫によって堆積した礫層と認定した。

このことから、この田道町遺跡が形成される以前に、かなり大規模な河川の氾濫があったことが考えられる。

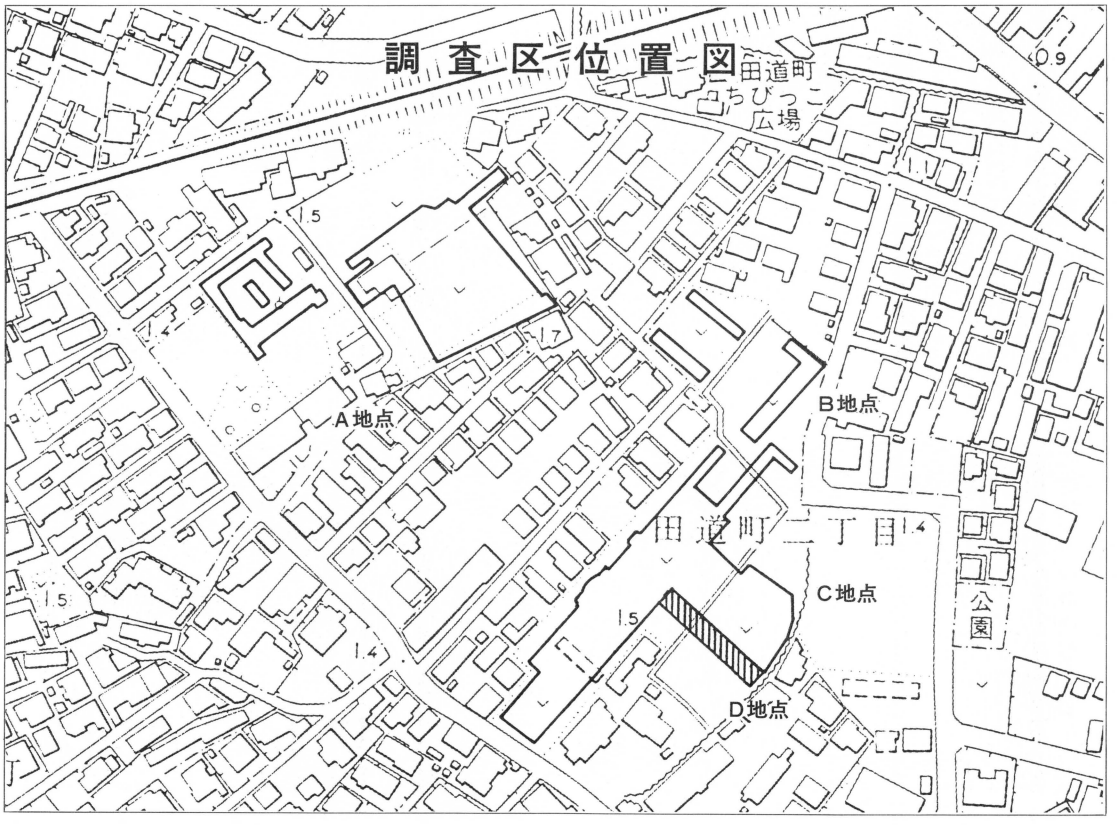
五　まとめ

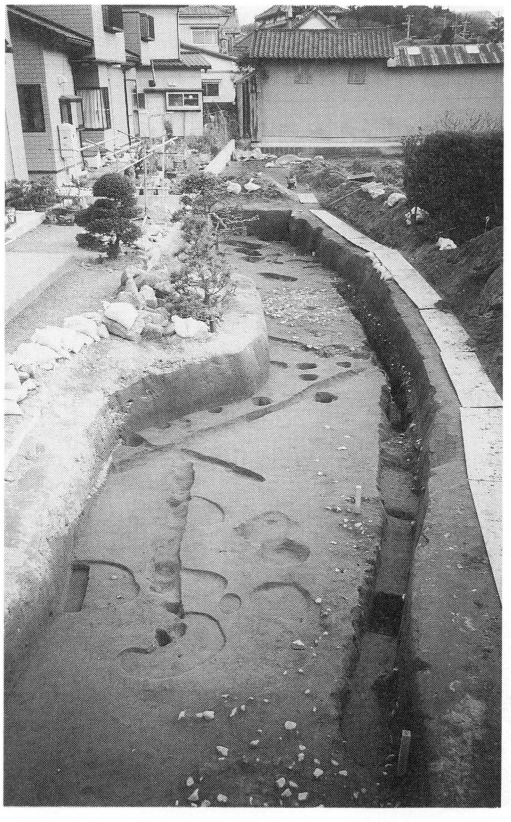
(1)8号溝は、大型住居や掘立柱建物跡などの中心的建物群を区画する何らかの施設と考えられる。

また、この溝を境にして柱の掘り方に違いが見られることから、施設の性格に違いがあることが考えられる。

(2)昭和五一年の調査では、古墳時代と奈良・平安時代の層の間に礫層が確認されていたが、今回の調査では、地山層の下に礫層が確認された。

このことから、田道町遺跡周辺の微高地が、何度かの河川の氾濫によって形成されたことが確認された。





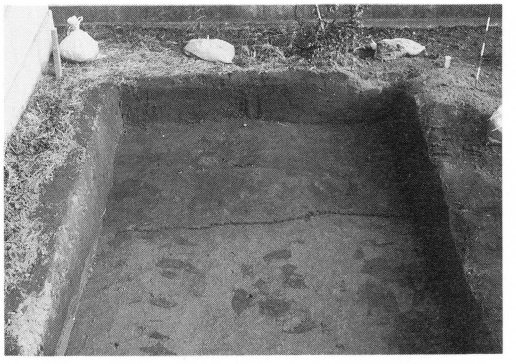
◀西区完掘状況

▶東区完掘状況

▲ 発掘調査前の状況（西から）

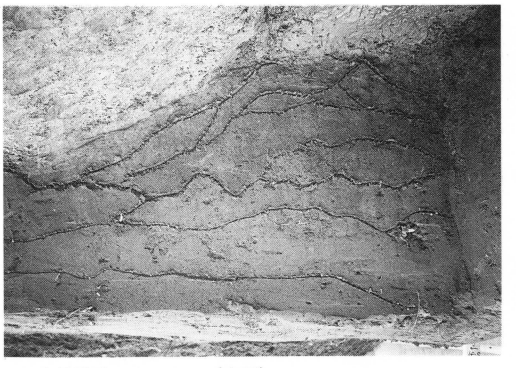
▲ 発掘調査前の状況（東から）

▲ 2号溝跡完掘状況（東区）



▲ 2号溝跡検出状況（東区）

▲ 4号溝跡完掘状況（東区）



▲ 2号溝跡セクション（東区）

▲ 2号ピットの根固め石（東区）

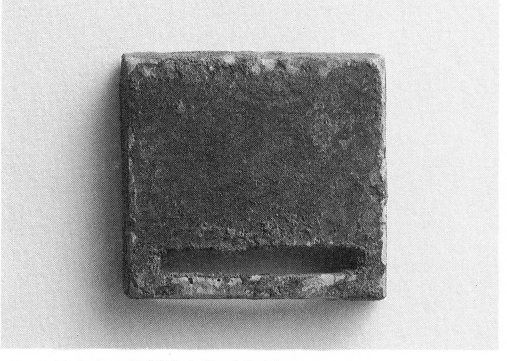
▲ 1号ピットの根固め石（東区）

▲ 8号溝跡（塀跡？）完掘状況（西区）

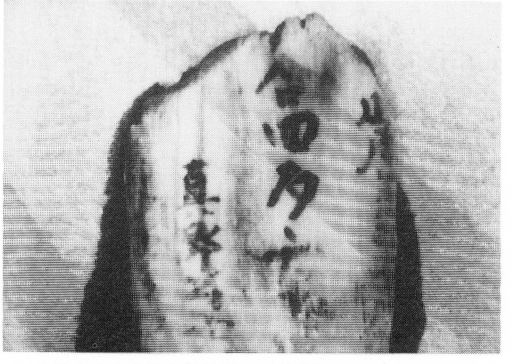
▲ 西区・ピット群の完掘状況

▲ 礫の堆積状況（西区）

▲ 21号ピット完掘状況（西区）



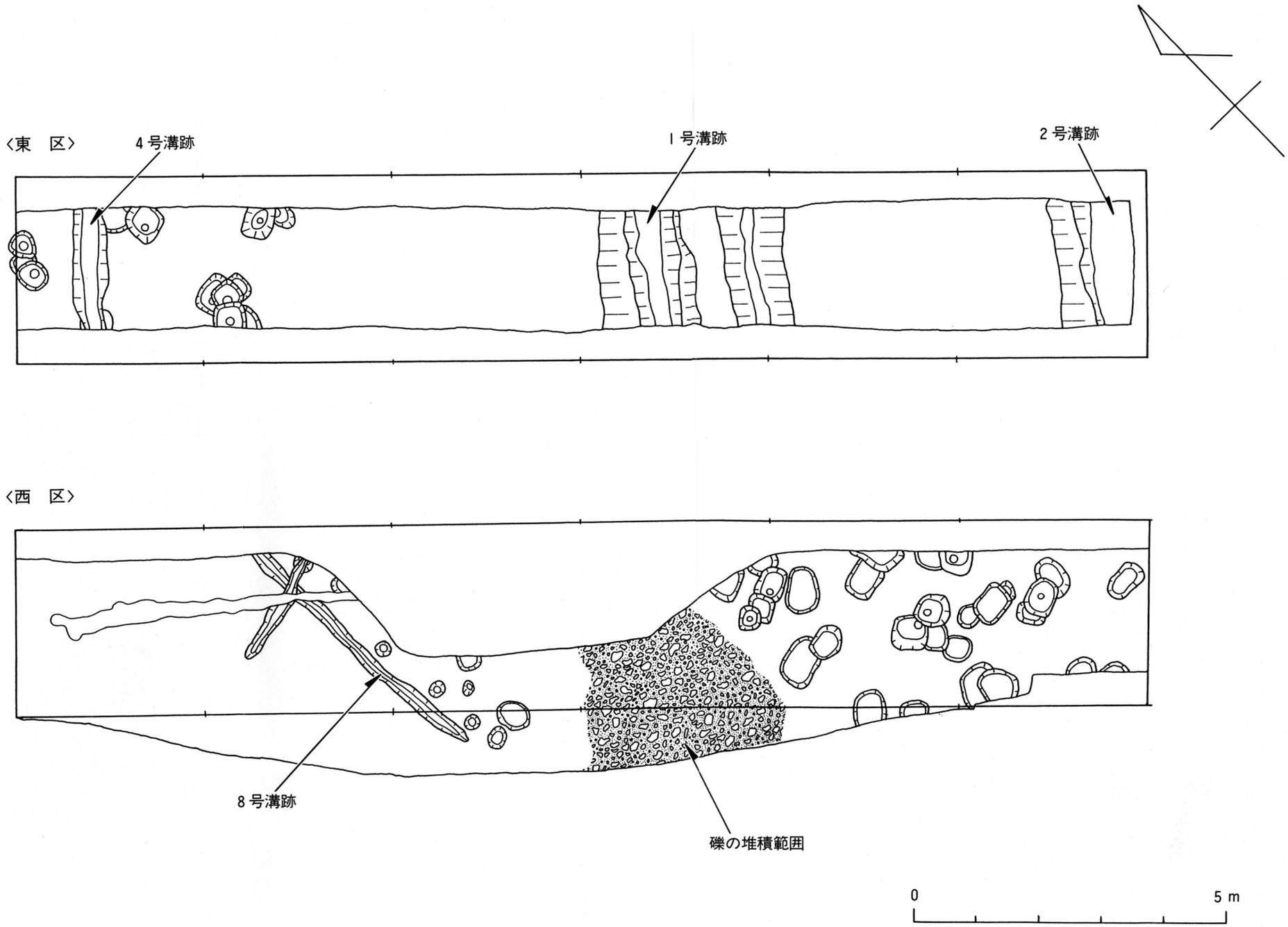
▲ C地点出土銅製帯金具（参考）



▲ C地点出土木簡赤外線写真（参考）

▲ C地点出土土師器坏（参考）

▲ C地点出土鉄製紡錘車（参考）



田道町遺跡D地点遺構配置図

1/400　田道町遺跡C・D地点遺構配置図

平成七年度文化財めぐり

平成七年度の文化財めぐりは、三回実施しました。県外の文化財めぐりについては、例年応募者が多数のため、抽選で参加者を決定していましたが、できるだけ多くのかたがたに参加していただこうと、同一方面で二回実施することとしました。

第一回と第二回は福島県相馬市方面、第三回は東和町方面の文化財を見学し、さまざまな歴史を心に刻んできました。

第一回・第二回文化財めぐり
相馬市・松川浦を訪ねて
―福島県相馬市・新地町、宮城県山元町の文化財―

期　日　第一回　十月二十九日（日）
　　第二回　十一月三日（金）
講　師　石垣宏石巻市文化財保護委員
参加者　第一回　四十三名
　　第二回　四十一名

午前八時、市役所前を出発し、仙台東部道路を通って、一路南下しました。山元町の、浜を見下ろす高台には、唐船番所跡があります。これは、外国船の航行を監視して代官所に通報するための施設で、仙台藩の海岸線に全部で五カ所（山元町・鳴瀬町・牡鹿町・歌津町・岩手県広田町）に設置されたものの一つです。山元町からは海沿いの道をとおって、福島県相馬市の景勝地「松川浦」に入ります。真新しい松川浦大橋を渡ると、右に潟湖、左に太平洋が一望に見渡せ、かつての歌枕の景観に、参加者は皆、目を奪われていました。昼食会場の近くには、林不忘にちなんだ「丹下左膳」の巨大な記念碑が建っています。

午後からは、相馬市の中心部にある中村城跡を散策し、相馬市文化センターを見学しました。中村城は、別名馬陵城とも呼ばれ、江戸時代を通して相馬氏十三代の居城として、中村藩六万石の藩政の中心となっていました。中村城の中には、藩祖相馬師常を祀った相馬神社や、市民に「妙見さま」として親しまれている相馬中村神社があり、参詣する人が絶えません。相馬市文化センター博物館では、ちょうど修験道展が開催されており、現在ではほとんど目にする機会がない修験関係の資料に触れることができました。

相馬市からの帰路では、旧浜街道の松並木を車中から眺め、途中「百尺観音」で休憩しましたが、その巨大さに圧倒されそうでした。

文化財めぐりの最後に見学したのは、山元町歴史民俗資料館です。まだ新しい資料館には、藩政期の資料をはじめとする歴史・民俗関係資料や、植物等の自然に関する展示があり、参加者は係員の説明に聞き入っていました。

◀第一回文化財めぐり

▶第二回文化財めぐり

第三回文化財めぐり
東和町・本吉郡を訪ねて
―東和町・本吉町・歌津町の文化財―

期　日　十一月十二日（日）
講　師　石垣宏石巻市文化財保護委員
参加者　二十四名

文化財めぐりで、宮城県内の各地をかなり回りましたが、テーマとしてなかなか難しかったのが、キリシタン（隠れキリシタン）に関するものです。その土地の人々の心の中には、現在でも密かに生き続けている信仰だからなのです。近づきがたいのですが、興味はつきないテーマでもあります。そこで、今年の文化財めぐりでは、この固いテーマに敢えて取り組んでみることにしました。

石巻市役所前を午前八時三十分に出発したバスは、国道四五号から三四二号を経て、約五〇分ほどで東和町に入りました。同町米川にある不老仙館は、嘉永五年（一八五二）に仙台藩主伊達慶邦の領内北部巡視の際の宿泊所として狼河原に建築されたもので、明治三十九年に米谷に移築されました。現在は、東和町指定文化財として大切に保存され、内部には著名な人々の書画をはじめとした数多くの文化財が展示・公開されています。

米谷から北上して米川に入りますが、ここから本吉町馬籠・岩手県藤沢町にかけては「隠れキリシタンの里」と称されている地域です。この地域にキリスト教が伝わった端著は、永禄年間（一五五八～七〇）に、葛西氏の家臣千葉土佐が、

製鉄技術者でキリシタンだった千松大八郎・小八郎兄弟を招いたことによる、と言われています。しかし、その後キリスト教は幕府の禁令により弾圧され、多くの人々が迫害を受けました。キリシタンとして処刑された後藤寿庵の碑も、米川にあります。また、東和町と藤沢町の境界周辺には刑場跡が点在し、藤沢町大籠のキリシタン殉教公園には、オープンしたばかりの大籠キリシタン資料館があって、見学場所は豊富です。

帰路には、霊峰として信仰されていた歌津町の田束山に登り、平安時代末期頃の造営と推定される経塚群をめぐり、泊浜の唐船番所から太平洋を眺めるなどして、有意義な一日を過ごしました。

▶第三回文化財めぐり

第42回文化財防火デー

昭和二十四年一月二十六日、法隆寺の金堂が火災に罹り、貴重な壁画が焼損してしまいました。これをきっかけとして、昭和三十年には毎年一月二十六日が「文化財防火デー」と定められました。

文化庁、消防庁では、国民一人ひとりに文化財愛護を再認識していただくことを主眼に、この日を中心として全国的に文化財の防火運動を展開しています。

石巻市でも、「文化財防火デー」の趣旨を尊重し、毎年市指定文化財とその所有者及び地域住民のかたがたを対象に、防火訓練を実施しています。平成七年度は、市指定文化財「木造薬師如来坐像」を所有している、真野字萱原の舎那山長谷寺で訓練を実施しました。

同寺の「木造薬師如来坐像」は、その底部にある墨書から永禄十一年（一五六八）に、京都の「四条東洞院大仏師法眼覚教」が制作したものということが知られており、像高三〇センチメートル余りの寄木造りの御像です。石巻市内では、近世以前の仏像で造像年や仏師の名前がわかるものは貴重であり、中世末期の石巻地方と京都との関係や、背後にあったであろう武士団の影響等を考える上で、非常に重要な意味を持つ作例と言えます。

平成八年一月二六日は、前日からの寒気団が居すわったままの寒い一日となりました。午前十時、乾燥・強風の両注意報発令中、長谷寺境内の観音堂から出火し、折からの強風にあおられて、指定文化財である「木造薬師如来坐像」に延焼するおそれがある、という想定で訓練が開始されました。火災の発見から一一九番通報、仮想文化財による搬出訓練、消火訓練と、通常の火災と全く変わらない真剣な訓練が続きました。長谷寺は、山の斜面にある寺院なので、凍りついた石段で滑らないように、慎重な行動が必要でした。訓練の後半には雪が降り始めましたが、午前十時四十分に無事訓練を終了することができました。

長谷寺とその檀家の皆さんは勿論ですが、地域住民のかたがた、石巻消防署、同中央分署、同湊出張所、石巻市消防団等、多くのかたがたにご参加・ご協力をいただき、紙上にてお礼申し上げます。

▶放水訓練

◀消火訓練

石巻市内所在指定文化財一覧

（平成８年３月現在）

≪国指定文化財≫

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
重要文化財　岩版	1	昭36. 2. 1	石巻市住吉町一丁目８－29	毛利　伸	縄文
史跡　沼津貝塚	1	昭47. 10. 21	石巻市沼津字出外		縄文～弥生

≪県指定文化財≫

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
牡鹿法印神楽	1	昭46. 3. 2	石巻市湊字牧山１－１	（代表）桜谷守雄	
仁斗田貝塚	1	昭50. 4. 30	石巻市大字田代浜字仁斗田		縄文
鳥屋神社奉納絵馬『奥州石ノ巻図』	1	昭63. 11. 29	石巻市羽黒町一丁目７－１	鳥屋神社	近世

≪市指定文化財≫

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
多福院板碑群	88	昭50. 6. 1	石巻市吉野町一丁目１－９	多福院	中世
平塚ツナ家文書	739	（第１次）昭51. 6. 1（第２次）昭53. 4. 1	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	近世
旧石巻ハリストス正教会教会堂	1	昭55. 12. 20	石巻市中瀬３－18	石巻市	近代
潮音	1	昭55. 12. 20	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	現代
イチョウ（吉祥寺）	2	昭55. 12. 20	石巻市高木字寺前48	吉祥寺	
イチョウ（龍泉院）	1	昭55. 12. 20	石巻市水沼字天似113	龍泉院	
葛西椀	3	昭56. 5. 18	石巻市大瓜字棚橋168	龍洞院	中世
黒潮閑日	1	昭56. 5. 18	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	現代
石巻市渡波獅子風流	1	昭56. 12. 19	石巻市渡波字西ケ崎11	（代表）津田富志義	
漁夫像	1	昭57. 12. 15	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	現代
宝筐印塔	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
相輪樘	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
零羊崎神社奉納絵馬（白馬の図）	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
零羊崎神社奉納絵馬（黒馬の図）	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
長禅寺「扁額」	1	昭61. 12. 1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
銅造菩薩立像	1	平元. 7. 31	石巻市渡波字仁田山２	洞源院	古代
銅造薬師如来立像	1	平元. 7. 31	石巻市高木字竹下75	日野孝栄	中世
銅造阿弥陀如来立像	1	平元. 7. 31	石巻市高木字竹下75	日野孝栄	中世
銅造観音菩薩立像	1	平元. 7. 31	石巻市高木字竹下75	日野孝栄	中世
木造観音菩薩坐像	1	平元. 7. 31	石巻市羽黒町一丁目１－27	永巌寺	古代・中世
木造薬師如来坐像	1	平元. 7. 31	石巻市真野字萱原２	長谷寺	中世
渡波塩田つぼ打ち唄	1	平４. 6. 1	石巻市流留字赤坂前７－１	阿部亀雄	

石巻市教育委員会文化財関係刊行物

石巻市文化財調査報告書第１集　水沼窯跡発掘調査報告
石巻市文化財調査報告書第２集　石巻城跡 ― 奥州葛西氏館跡の調査 ―
石巻市文化財調査報告書第３集　五松山洞窟遺跡 ― 発掘調査報告 ―
石巻市文化財調査報告書第４集　田道町遺跡 ― Ａ地点発掘調査概報 ―
石巻市文化財調査報告書第５集　田道町遺跡 ― Ｂ・Ｃ地点発掘調査概報 ―
石巻市文化財調査報告書第６集　箕輪山 ―石巻市大瓜箕輪山貝塚における埋蔵文化財調査報告―
石巻市文化財調査報告書第７集　田道町遺跡

石巻市文化財だより第１号～第24号
石巻市文化財だより別集・鋳銭場関係資料『金局公用誌』一
石巻市文化財だより別集・鋳銭場関係資料『金局公用誌』二の上
石巻市文化財だより別集・鋳銭場関係資料『金局公用誌』二の下
石巻市文化財だより別集・鋳銭場関係資料『金局公用誌』三
石巻市文化財だより別集・鋳銭場関係資料『金局公用誌』四
石巻市文化財だより別集・鋳銭場関係資料『金局公用誌』五

文化財たんぽう　1
文化財たんぽう　2
文化財たんぽう　3
文化財たんぽう　4

文化財マップ ― 遺跡編 ―

石巻市文化財だより（第25号）

平成８年３月19日　印刷
平成８年３月22日　発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目１番１号
電話（0225）95-1111 内線 345

印刷：株式会社 鈴木印刷所
石巻市蛇田字新谷地前121
電話（0225）22-4101